Dreame Researcher

音無声無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｒｅａｍｅ　Ｒｅｓｅａｒｃｈｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ９１５４Ｚ

【作者名】
音無声無

【あらすじ】
これは魔法と関わり合うことになってしまった男が、夢を叶えるために努力する話。
そして夢を叶えながら努力する話。

俺の日常

「ふっ、またつまらぬものを切ってしまった……」

俺の後ろには俺が切り捨てた男が倒れている。

男はピクリとも動かず。

床は赤い液体に濡れている。

「龍斗、お前が悪いんだ」

手に持った得物を腰に収める仕草をしながら言う俺の声は震えていた。

怒りとそれを遥かに超える悲しみに

「お前が！　お前が！　俺の楽しみにしていたアニメのネタばれなんかするから！！　だからこうなる！」

「いやいやいや、海斗が持っている箒だから！　龍斗もノリノリでトマトジュース撒き散らしながら倒れたけど、海斗、君が持ってるのただの箒だから！！」

「何を言う達也！　達人の手にかかればただの箒で鉄が切れる！　なら俺の手にかかれば龍斗程度造作もない！」

しかし、そう言いきった俺の背後から俺に絶望をもたらす言葉が聞こえた。

「その後、エイトはキングを新必殺技ファントムクラッシャーで倒したのだ」

まさか、まさかそれは！

「そしてエイトは無事にエリス姫を助け出した」

「龍斗、貴様ぁ！　アルカディアサーガ１２話の最後までネタばれするとは、覚悟はできているんだろうな」

振り向いたそこにいたのはついさっき俺が斬鉄剣（※ただの箒）で切り捨てたはずの龍斗だ。

「覚悟？　それをするのは貴様だ、海斗。俺は忘れてはおらんぞ。先週貴様が俺の大好きな魔法戦隊ガントレットを馬鹿にしたことを！！」

何を言い出すかと思えばそんなことか

「あんなものを好きな貴様の精神を疑うわ！　何だあれは！　正義の味方なんて自称してるくせにやることと言ったら、魔法で数十人に分身して１人か２人の悪役を数の暴力で袋叩きにするという、正気を疑う内容だろうが！！　あれが子供向け特撮アニメとして放映されているのを見て俺は大好きな翠屋のシュークリームを吹き出すはめになったんだぞ！　どうしてくれる！」

週に１回しか食べることのできない、あの翠屋のシュークリームが無駄になったときのあの絶望を俺は忘れない。

「んなこと、知るか！　それに確かにあのアニメは悪役のイケメン

達がなんとかガントレットに勝とうと修業をし、新たな技を編み出していて、むしろ悪役側が主人公っぽいが、それでも！　イケメンをフルボッコにするという1点において、あいつらは俺達の正義の味方なはずだ！！」

「くっ」

反論できん。
イケメンは敵だ。

確かにそれは俺たちにとって完全なる真理だ！

だが、だが！

「だが、あのアニメは辛い現実を直視させてくるだろうが！　脚本家は何考えてんだよあれは！　ガントレット側が悪役を撃退する毎に、はじめはこちら側だったヒロイン達が必死にガントレットの物量に勝とうとしている悪役を見て、次々悪役側に惚れて敵側に寝返っていくとか、ほんと何考えているんだよ！　一応悪役側は人類の殲滅なんてしようとしてんだぞ！　あれか、イケメンは正義だとでも言うつもりか！？」

「確かに、そのことは俺も辛く思っている。だが、それでも俺はあのアニメが好きなんだ。きっと、きっとガントレットはイケメンに目にものを見せてくれると信じているから！！」

龍斗の叫びが教室に響く。

龍斗の言う通り、最終的にガントレット側が勝つなら俺にとっては問題はない。

イケメンは死ねばいい。

しかし、あのアニメ、最終的にはヒロイン達が悪役側を改心させて終わりそうな雰囲気なんだよな。
そうなれば絶対ガントレット側は空気と化す。

そんな光景は見たくない。

「だから海斗、俺の好きなアニメを馬鹿にするな！」

俺と龍斗は教室の真ん中で睨み合う。
一歩も譲ること無くお互いの顔を睨みつけ合う。
このままでは埒が明かん。

「龍斗、男が譲れないものがある時にやることは１つだ」
「そうだな」

俺と龍斗は同時に構える。

龍斗は漫画Ｆｉｒｓｔ　Ｓｔｅｐの真似をしてボクシングの構えを、
俺は手に持っている斬鉄剣で居合いの構えを取る。

もちろん意味などない。
鞘もないのに居合い抜きはできない。
だがモチベーションは上がる。

先に動いたのは龍斗だった。

「いくぞ、海斗！」

一気に左足から踏み込みながら、左腕でジャブを放ってくる。
しかし、そんなものは全く怖くない。

「龍斗、愚かなり」

俺は焦ることなく斬鉄剣を振り抜く。

素手の龍斗と箒をもった俺とでは俺の方がリーチが長いのは当然だ。
だから、龍斗のジャブは俺には届かず、俺の振り抜いた斬鉄剣は龍斗の身体を切り裂く。

「くっ！」

俺の一撃を受けた龍斗は追撃を避けるために机の間を縫うようにして距離を離す。

ちっ、俺の位置からだと机と鞄が邪魔で行き難い場所に逃げやがったな。

だが、その位置はお前にとっても不利な位置だ！

斬鉄剣を片手で持ち、その長いリーチを生かして机越しに龍斗に斬りかかる。

それに対して龍斗がとった行動は簡単なものだった。
ちょっと後ろに下がる。
ただそれだけだ。

だが、ただそれだけで俺の一撃は龍斗に届かなくなる。

攻撃を避けられたせいで身体が泳いで隙ができる。
しかし、間に机がある以上龍斗が即座に反撃に移ることはできない。
必ず机を迂回知る必要がある。
その間に俺は態勢を立て直せばいい。
そう俺は思っていた。
だが、龍斗は俺の想像を遥かに超える行動に出た。
「俺はすずかちゃんに告白するまで死ねない！！」
なんと奴は死亡フラグを叫びながら、机を飛び越えてドロップキックをしてきやがった！
くっ、此処は俺も死亡フラグを叫びながら何かやるべきか？
そんな馬鹿なことを考えていたせいで避けることもできずに俺は龍斗のドロップキックをくらい、龍斗と一緒に倒れる。
くっ、中々いい一撃だ。
だが俺は負けん！
素早く龍斗から身体を離し立ち上がるのと龍斗が立ち上がるの同時だった。
そして、俺は龍斗の後ろを見てしまった。
やばいぞ死亡フラグ、さすがだ死亡フラグ、仕事振りが半端ないな。

「龍斗よ、死亡フラグというものを知っているか？」

「もちろんだ！　だが、俺はこの程度の死亡フラグ程度乗り越えて見せる！！　いや、すずかちゃんに告白するまで死んでたまるものか！！」

やべえ、やべえぞこれは、マジで龍斗が死ぬかもしれん。

奴は気づいていない。
自分の死がすぐそこに迫っていることに

すまん龍斗、土下座をしておくから許してくれよ。
だが、土下座した俺を見た龍斗のセリフは俺の考え得る限り最悪のものだった。

「ふっ、俺のすずかちゃんへの愛の勝利だ！！」

龍斗お前は気付かなかったのか？
教室にいる皆がお前に送っていた、止めろこのままでは死ぬぞ！！
　という視線に！

「えーと、あの、そのなんというか気持ちは嬉しいんだけど、その……」

勝ち誇っていた龍斗の顔から一気に血の気が引いて行き、汗がだらだらと流れ始めているのが分かる。
龍斗の首が油の切れたブリキ人形のような速度で後ろに回っていく。

やめろ、止めるんだ、龍斗！

今後ろを向けばお前は死ぬぞ！

そう言いたかったが、俺の口は動かなかった。
龍斗が振り向いたその先にいたのはアリサ＝バニングスと高町なのは、そして龍斗が盛大に告白すると宣言した月村すずかだった。

凍りつく空気、教室にいる人間の誰もが動けない。

「えーと、いや、その、あのな」

しどろもどろになって見れたものじゃないが、俺には見届ける義務がある。
この事態の責任一端は俺にあるんだからな。
……決して面白そうだからという野次馬根性ではない。決してだ。

当事者の2人は共に慌てふためいて「あの、その」ばかりで碌に会話にもなっていない。

誰かが割り込んで収集をつけるべきだ。
誰もがそう思っている。
だけどそれと同時に誰もがそんな役割はしたくねえ、とも思っている。

だから誰も動かない。

そう思っていたのに動いた奴がいた。

奴の名はアリサ＝バニングス、このクラスきってのツンデレだった。
しかし今この瞬間奴は勇者にジョブチェンジしやがった！

「あーもう！　まどろっこしいわね！　あんた、男なんでしょ！？
しゃきっとしなさいよ！！」

すげえ、凄過ぎるぞアリサ＝バニングス。
こんなに初々しく青春している2人の間に割り込むなんて常人には絶対出来ねえ。

漢（おとこ）だよあんたは

これでこの龍斗教室告白事件は終わった。この教室にいた誰もがそう思ったはずだ。
だが、教室の皆の予想を遥かに超えて龍斗は漢（おとこ）を魅せた。

「……ああそうだな。漢（おとこ）ならしゃきっとしないとな」

「えっ、ええそうよ？　男ならしゃきっとしなさい！」

バニングスも龍斗が本当に自分の言葉通りにしゃきっとするとは思っていなかったのだろう。
その声に隠し切れない動揺が出ていた。

まあ俺もバニングスに至近距離で凄まれて怯まなかった龍斗はすげえと思う。

俺の知る限り同年代でバニングスに凄まれて怯まなかった奴は他には1人しかいないからな。

「俺、武田龍斗は月村すずかのことが大好きです！　付き合ってください！！」

すげえ、すげえよ龍斗！

お前の月村に対する好意は知っていたつもりだったけど、それは知っていたつもりでしかなかったんだな。

精々アイドルに対する憧れみたいなもので、この衆人環視の中開き直って告白する程にまで月村のことが好きだとは思ってなかった。

というかお前に惚れている女子から俺は相談受けてたりするんだが、どうすりゃいいんだろうな。

まあそれについてはひとまず考えないようにしておこう。それより目の前の問題を解決することが重要だ。

ほら、月村を見てみろよ。

顔真っ赤にして俯いちまってるじゃねえか。

２人の間にも沈黙が落ちただただ時間だけが過ぎていく。

体感時間では１時間経ったような気もしたが、時計を見ればまだ２分も経っていない。

少しでも早くこの空気を終わらせたいが、龍斗の本気を見せつけられた俺にはこの空気をぶち壊すことなど到底できない。

だが、勇者（バニングス）は違ったようだ。

「アンタた、むぐっ」

何か言いかけたバニングスに駆け寄り咄嗟にその口を手で塞ぎ。

龍斗と月村の傍から引き剥がし、呆然と立っている高町の傍まで下がる。

「っつ！」

口を塞いでいる手が噛まれたが我慢するんだ俺！

俺の悪友の一世一代の舞台の邪魔はさせねえ！

俺とバニングスが音も立てずに揉み合っているうちに月村も覚悟を決めた様だ。

真っ赤になっている顔を上げ、途切れ途切れではあるが返事を紡いだ。

「その…ごめんなさい…私はまだ誰とも付き合う気はないんです……」

その言葉を受けた奴の目からは汗が溢れていた。

あれは断じて涙などではない！

男は泣かない。

だから目から零れるあれはただの汗だ！

「……そうか、きちんと、返事をしてくれて、ありがとう」

途切れ途切れで鼻声になっていたがそれは聞こえない振りをするんだ。

龍斗はそれだけ言うと教室から出て行った。

俺はバニングスの口を塞いでいた手を離し、奴が出て行ったドアに向かって敬礼した。

英雄には最高の敬意をもって接すべきだ。
そう思ったのは俺だけでは無いようで、教室にいる男子全員が龍斗が出て行った扉に向かって敬礼している。
バニングスが何か喚いているが無視だ。
中々に強力なパンチが腹にめり込む。
……無視するんだ。
ローキックが打ち込まれ体がふらつくが無視するんだ！
股間に向けて蹴りが来ているが無視……出来るか！！！
全力で後ろに下がり何とか蹴りを避ける。
「バニングス！　お前はやって良い事と悪い事の区別がつかんのか！？　股間はアウトだろ股間は！！」
「あんたが無視すんのが悪いのよ！　それにあんただって私の胸揉んでたじゃない！！」
「はっ！　存在しない胸は揉めん！　寝言は寝て言え！」
小学3年生に胸などあるものか！
見事なまでに絶壁だろうが！
「そこまで言ったんなら……覚悟は良いわね？」
怖えええ。
なんで小学3年生の女子のくせしてこいつは何でここまで怖えええメ

ンチ切れんだよ。

家は相当な金持ちだという話だけど、実はマフィアの娘だったりするんのか？

だが俺に退く気はない。

こいつにはやって良いことと悪いことがあることを体に教え込んでやる！

……負けました。

完膚なきまでに負けました。

殴りかかっても受け流され、カウンターの拳が腹にめり込み。

バニングスの攻撃は面白いくらいに俺に直撃しまくりました。

現在ずたぼろです。

教室にいる皆からの憐みの視線が辛かったから5時間目の授業をぶ

っちぎって屋上で黄昏てます。

「世の中無情だよな～」

「本当にそうだな」

ここには俺と同じく黄昏ている奴もいるから、傷ついた俺の心を癒すのに丁度いい。

「告白したお前は振られるし、女に全力で殴りかかった俺は返り討ちだぞ。ほんとやってられないよな～」

「いや海斗、女子に本気で殴りかかったお前に同情する余地はないと思うぞ？」

裏切り者め。

「だが、それにしてもバニングスのやつ実はゴリラかなんかじゃないんだろうか？　あの身体であの威力を出すなんてとても人とは思えんのだが」

本当にあれは俺たちと同じ人間なのか？
俺も同年代の野郎どもとはよく喧嘩しているが、バニングスほど強烈なパンチを打ってくる奴にはあったことが無かった。

「普段の行動見ているとそうは思えないけど、バニングスもいいとこのご令嬢みたいだから護身術かなんか習ってたんじゃないのか？」

「そうかなー、そうだといいなー。素で女子に喧嘩で負けたとかなれば立ち直れんかもしれん」

後でバニングスに護身術かなんか習ってるか聞くことにしよう。

「それでさー、失恋した気分ってどんなものよ？」

多少無神経だと思うが俺が一番聞きたかったことを聞くことにした。

「……海斗、失恋するとは予想以上にショックを受けるものなんだな。泣いている間は悲しかったけど、泣き終わった今は呆然自失というかなんというか、何もする気が起きない」

「燃え尽きたわけか」

「そうかもしれないな」

そんな会話をしていた時にチャイムが鳴った。

さて聞きたいことは聞いたし、ホームルームに出て帰るとするか。

「龍斗、お前ホームルームには来るか？」

「いやいいわ。もう少しここでぼーっとしてる」

龍斗は俺の問いに振り向くことなく答えると、再び空を見上げてぼーっとしだした。

早く失恋から立ち直れよ悪友（しんゆう）。

その為の切っ掛けは作ってやるからさ。

俺の日常2

さて今日は楽しい楽しい土曜日だ。

午前中に授業は終わり、午後からはいくら遊び呆けても問題ない週に1度の最高の日だ。

日曜？

日曜はサッカーで1日潰れることが殆どで、それ以外のことはできないから除外だ。

サッカーもそれはそれで楽しいからいいけどな。

うん、親に無理やり入れられて始めたが、なかなか楽しめているのは嬉しい誤算だった。

さて、そんな楽しい土曜日になるはずだったのだが、今俺は目の前で起きたあまりにも予想外な光景に呆然自失といったところだ。

なんと、龍斗の靴箱の中に2通のラブレターが入っていた。

繰り返す。

龍斗の靴箱の中に2通のラブレターが入っていた。

な・ぜ・だ！

あれだけ俺と一緒にバカばっかりやってるおかげで、女子からはそういう対象と見られていなかったはずの奴が、なぜラブレターなんてものを2通も貰っているんだ！

２通も貰うなんてありえない！！

俺は原因を突き止めるべく様々な人間にインタビューを試みた。

１人目　とある茶髪の少女

「龍斗君って昨日までただの三枚目だと思ってたけど、昨日のあの姿はかっこよかったよ」

あれが原因なのか！？

確かにあれは男らしかったがたったあれだけのことでこの３年間延々と築き上げてきた三枚目としてのイメージが払拭されたとでも言うのか！？

真実かどうか確かめねば、調査を継続する。

２人目　とある野郎

「ちょっと！　僕のときだけ紹介が野郎ってなんだよ！」

美少女は優遇され、野郎は冷遇される。

それが世界の意志だ。

「……一理あるね」

だろ。

じゃあそう言う訳でお前は龍斗が突然もて出したのはなんでだと思う？

「認めたくないけど龍斗は普段の言動を除けば十分二枚目で通用するからね。そして龍斗は昨日男を魅せたから、それがきっかけになったんだろうね」

馬鹿な！

1人目の少女の答えと同じような答えだというのか！

……いやこう考えるんだ。

龍斗がこれだけもてるようになったんだ、俺も男らしさを見せればもてるのでは？

「海斗、君じゃ無理だ。君が三枚目を抜け出してもてるなんて、世界滅亡の危機でも起こらなけりゃ到底ありえない」

そこまで言うか貴様は……覚悟はできているんだろうな？

3人目　とある金髪の少女

もてたいです。

「あんたの親友がぼろ雑巾みたいになって転がってるんだけど？」

俺の繊細な心を傷つけた報いだ！

そんなことより『もてたいです！』

「ああそう。アンタに常識を求めた私が馬鹿だったわ。それにしてもアンタ、調査の目的が変わってない？」

変わってなどいない。

俺は最初からいかにすれば非モテから抜け出せるかその方法を知る

ためにこの事件の原因の調査を開始したんだ！

「事件って、まあ、いいけどさ。延々とアンタと話したくないから単刀直入に言うけど、アンタじゃ無理よ」

そんな馬鹿な！

俺が本気を出せば女にもてるくらい簡単なはずだ！！

「そんな考えを持っているうちは絶対無理よ。いや、それ以前にアンタは言動とかそれ以前に存在がうざいのよ。傍から見てる分には楽しいけど絶対に近づきたくないわ」

……ちくしょう……目から汗が流れそうだ。

これはいじめなのではないだろうか？

そんな思いを込めて近くにいる紫色の髪の少女に視線を向けたが返ってきた答えは無情だった。

「ええっと、海斗君相手だし、こんなものじゃないかな？」

……君はこのままいけばきっと言葉で人を殺せるようになるよ。

調査は俺の心に傷を残しただけでなんの成果もなく終了した。

原因が分かっても、それが俺に応用できなければ何の意味もないのだよ！

世界は無情なものだな。

「いやいやいや、たったこれだけで世界は無情とか言ってたらどうしようもなくなるよ？」

達也！

昨日まで非モテだった奴が今日突然リア充野郎に変わるというのは理不尽極まりないではないか！？

「いや、そう言う訳じゃないと思うよ。さっきも言ったけどさ、海斗は知らなかったかもしれないけど龍斗は元々ある程度の人気はあったよ。普段の言動のせいでそれをほとんど感じなかったけどね」

馬鹿な奴め！

今の言動が知られるまで俺達3人の中で一番もてたのは龍斗だということくらい知っておたったわ！

だから今まで馬鹿な言動を龍斗と共に繰り返すことによって奴が告白される事が無いようにしておったのだ！

「最低ね」

「ええっと、そういうことしちゃ駄目だよ海斗君」

これは俺から奴への善意を込めた行動だ。

なにせ俺のおかげで奴は女の子を選ぶという悪行を犯さずに済んでいるのだからな！

……ところで貴女方はどちら様ですか？

「その歳でボケたの？」

「海斗君、さすがにクラスメイトの名前を忘れるのは酷いよ」
お前達がアリサ＝バニングスと月村すずかだということくらいわかっておるわ！
俺が聞きたいのはそう事じゃない。
なんでお前達がここにいるのかということだ。
この秘密基地の場所は俺と龍斗と達也しか知らないはずだ！
「アンタ、教室で馬鹿みたいな質問を私達にしてきたでしょ？」
馬鹿みたいな質問などしていない、あれは「あー、はいはい、アンタがどう思ってるかなんてどうでもいいけど、質問してたでしょ？」
……まあ、してたな。
「で、私達はまたあんたが馬鹿やるんじゃないかと思ったわけよ」
思ったわけか。まあ、普段の言動がアレだからしょうがないな。
「……分かってるなら、やめなさいよ」
嫌だ！
そんなのは楽しくない。
「……アンタね。まあ、そんなわけでアンタの馬鹿を止めるためにアンタを監視しようということになったのよ」

俺のプライバシーはどこに行った！？

「そんなものがあるわけないでしょう？　今まで自分のやってきたことを思い出しなさい。アンタにそんなものを与えたら世界に悲劇が増えるだけよ」

異議あり！
俺は皆に笑いと癒しを与えるべく行動している。
クリオネ上映事件や担任づら事件がそれを証明している！！

「死ねばいいのに」

ただ憎悪だけが込められた声が響いた。
鳥肌が立ち、背筋が凍った。
ええっと、月村？　冗談でも言っていいことと悪いことがあるんだぞ？
お前そんなキャラだったか？

「死ねばいいのに」

ヒシヒシと命の危険を感じる。
ええっと、月村様私（わたくし）は何かあなたの逆鱗に触れましたでしょうか？

「うん、クリオネ上映事件のときね、あの場所に私も居たんだ」

ならばなぜだ！！
あれは皆に溢れんばかりの癒しを与えたはずだ！！

「はじめの1分間だけはね。その後クリオネの再生実験と称してクリオネが切り刻まれるのを見せられたり、捕食中の映像を見せられ

たけどね」

ふっ、それはそこまで見たほうが悪い。
見たくなければ、視聴覚教室から出ていけばよかっただけだ。

「死ね」

命令形だと！！

「その扉を棒で開けられなくしたのはどこの誰？」

そんなこともあったような、なかったような……
……だっ、だが、担任づら事件は皆が笑っていたはずだ！

「そうだね。担任の先生がやけくそになって叫んだ自嘲ネタに、乾いた笑いが教室に響いてたよね」

……笑いは笑いだと言えませんか？

「言えるわけないよ（わ）！」

……そうですかー。
おかしいなー、俺は大爆笑して腹筋が崩壊しそうだったんだがなー。

「で！　話が逸れたけど、そんなわけでアンタを見張ってたわけよ。
そしたらアンタを見張ってたクラスメイトの1人がアンタが丁度こ

の使われてないはずの教室には言ったっていうじゃない。だからアンタが何かしでかさないうちに、こうして私達がやってきたという訳よ」

まあ、到底納得できないが俺達の秘密基地にバニングスと月村がやってきた理由は分かった。

で？

どうするつもりだ？

「ここまでやっておいてなんだけど、今回は特に何もする必要はないみたいね。アンタが告白の邪魔をするつもりだったのならコンクリートに詰めて海に沈めようと思ってたけど、そうじゃないみたいだし」

……さすがに例えが物騒過ぎやしませんかね？

「女の子の恋心を踏みにじるような奴は死んで当然よ」

そうですか。

「だけど今回はアンタもそんなことするつもりじゃないみたいだし、特別に見逃してあげるどころか協力してあげようと思ってるわよ」

それは助かる。

じゃあバニングスはこの垂れ幕を教室に飾りつけておいてくれ、月村はここで俺と一緒に紙吹雪の制作だ。

「武田の見張りはしなくていいの？　準備の途中で教室に戻ってこられたら最悪なんだけど」

龍斗の見張りは達也がやってくれているから大丈夫だ。
緊急時には俺に携帯で連絡する様に言ってある。
さっきも報告ついでに雑談してただろ？

「雑談がメインだったように思えるけどね」

細かいことは良いんだよ。禿げるぞ、バニングス。

「禿げないわよ！！」

冗談だ。

それより手伝うなら急いでくれ、本当ならこの作戦の決行は明日の予定だったんだ。
準備が半分くらいしかできてない。

「なんでアンタが武田が告白される日の予定を組んでるのよ」

それはもちろん龍斗に惚れてる女子から相談を受けたからに決まっているだろう。
今まで色々と龍斗がその女子に振り向くように工作もしてきたぞ。
あいつは月村に夢中で全く気がつかなかったけどな。

「意外ね、アンタがそんなことやってるなんて」

そうか？
人の恋愛を見て楽しむのは最高の娯楽の１つだと思うんだが、というよりお前たち女子も恋愛事については異様なほど食いつくだろうが。

「まあ、そう言われればそうなんだけどね。で、話が逸れたけど明日やる予定だったこれが今日にずれこんだのは何でよ？」

まあ、イレギュラーが起きてな。

俺が相談を受けていた女子以外の奴が龍斗の靴箱にラブレターを入れているのを俺が相談を受けていた女子が見たんだよ。

それで焦って俺に断りも入れることなく、靴箱にラブレターを入れやがった。

どうせなら先に入ってたラブレターを破り捨てるくらいすれば面白かったのにな。

「それやったら、もし告白が成功しても他の女子から仲間外れにされるわよ」

その通りだな。

さて、バニングス、雑談はこれで終わりだ。さっさと教室にその垂れ幕を持って行け、紙吹雪もお前と雑談しているうちに月村が９割がた作ってくれたからな。

「アンタ、サボってんじゃないわよ」

話しかけてきたお前には言われたくないな。

「ここまで長引いたのはアンタが無駄口叩くからよ」

理不尽な。

「まあまあ、アリサちゃん、私は気にしてないからね？　それより早く飾りつけに行こうよ」

「……すずかがそう言うんなら良いけど」

よし話は終わったな？
後は体育倉庫から借りてきたこのくす玉に紙吹雪を詰め込んでいくだけだ。

「黙って借りてくるのって、盗むのと変わりないわよね」

あー、あー、何も聞こえない。
それに今さらなことだ。

……サプライズも詰め込んだ。準備は万端だ。

「ところで今さらな疑問なんだけど、龍斗が本当に里香の告白にＯＫするの？　昨日失恋したばっかしなんだから、ＯＫしない可能性も高いんだと思うんだけど」

なんでお前が俺相談を受けていた女子を知っているかは知らないが、それなら問題ない。

男とは馬鹿な生き物だ。

ちょっと可愛い女子に告白されれば、ころっと惚れてＯＫする。

「……あんまり聞きたくなかった答えね。でもそれなら里香の方じゃないラブレターの方の告白にＯＫするんじゃないの？」

バニングスの言うことにも一理ある。

だがそこは龍斗の幼馴染である多村の幼馴染補正に賭けるしかない。

一応多村は龍斗と一番長い時間を過ごしてきた女子なんだ。その間に積み重ねた時間が龍斗の心を多村の方に引き寄せることをな。

「ああ、そう言えばそうだったわね。家が隣同士で生まれた病院も同じだそうだからねあの２人。一緒に過ごしてきた時間の長さは家族を除いたなら一番長いでしょうしね。……それにしてもアンタって意外とロマンチストなのね」

長い時間を一緒に過ごせばどんな相手にだろうと多少は愛着がわく、そこのところに期待だな。

ここまで準備しておいて多村の告白が成功しなかったら俺の今までの努力は何だったんだという話だしな。

それと俺がロマンチストなのは当然だ。

ロマンが無けりゃ人生なんて退屈極まりないだろう？

「まあ、ないよりあったほうが良いわね」

告白の結果を達也が報告してくるまでの間暇になるかなと思っていたが、バニングスと話し続けていたおかげで退屈せずに済んだ。

いつも一緒にいるはずの高町が１人で先に帰っていたのが気になったが、ここの最近はよくあることのようだし、まあ俺にはどうでも

いいことだ。

着信音が鳴った携帯をとる。

こちら海斗、首尾はどうだ？

「状況は予想を超えて推移している」

何！？

いったい何が起こった！？

「龍斗の奴、里香ちゃんとキスしやがったんだよ！！」

何だそんなことか。

「なんだと！？　キスだよキス！　海斗、君はこの状況を予想していたとでも言うつもりなのか？」

まあな、多村に龍斗が躊躇うようだったらキスでもすれば簡単に落ちると言った覚えがあるからな。

告白に向かう前の多村の様子から考えると、そこまでやってもおかしくないと思っていただけだ。

それに心配するな。

リア充に対する罰は用意してある。

だから達也も見逃すことが無いように教室に来いよ。

「さすが海斗だね。最低なまでに自分の欲望に忠実だ」

それは当然のことだろう？

まず自分が楽しめることじゃなければ、俺はここまで力を注いだり

せんよ。

電話を切る。

さて教室にいる皆さま、告白は無事に終わったようだ。
達也からの報告によれば2人は幸せそうな顔をして教室に戻ってくるという話、ならやることをやるだけだろ？

改造クラッカーは持ったか？
掛け声のタイミングと内容は覚えているか？

よし問題ないようだな。それでは待つぞ。

後、達也が入ってくるだろうがその時に間違ってクラッカーを使うなよ？
一応ノックをするように言ってあるがな。
間違った奴は口の中に爆竹詰め込んでクラッカーの代わりをしてもらうぞ。

「……アンタなら本気でやりそうだから手に負えないわ」

廊下から足音が響いてくるたびに教室に緊張が走る。

龍斗達はまだ来ない。
達也から連絡が来て既に5分が経っている。
屋上からこの教室まで大体5～6分くらいしか掛からないからそろそろ来るはずだ。
……廊下でイチャイチャし過ぎて遅れているという考えたくもない可能性もあるがな。

教室の扉がノックされて達也が入ってきた。
よしきちんと取り決めは守ったな。ノックもせずには言っていたら殴り飛ばしているところだ。
教室にいた奴らからは安堵のため息が出ている。

「俺が言ったことは冗談だったのにな。さすがに遊びでやって良いことといけないことの区別くらいはつくぞ」

「それが分かっていてもやりそうだと思われてるのがあんたなのよ」

普段の行動から考えるとそう思われても仕方ないな。
まあ、今はそんなことはどうでもいい。どうやらメインの2人が来たようだ。
クラッカーを構える。

教室の扉の窓に2人の影が映り、扉が開いた。

その瞬間総数40個の改造クラッカーが炸裂し、通常の2倍の炸裂音と追加された紙吹雪が2人を出迎える。
予想外の出来事に2人とも呆気にとられて立ちすくんでいるのが笑えるな。

紙吹雪が全て床に落ち、2人が正気に返ろうとした瞬間

『おめでとー！！』

クラスメイト全員からの祝福の言葉が教室に響き、そして沈黙が訪れた。
誰も一言もしゃべらない。祝福された2人は再び凍りついたように動かなくなり、クラスメイト達はそんな2人の様子をただ眺めていた。

そんな時間が少しの間続き、沈黙は破られた。

「「みんな……ありがとう！」」

2人は涙を流しながら感謝の言葉を言い、それを聞いたクラスメイト達が2人に近づき各々の祝福の言葉を言っている。

さてその間に最後の仕込みをするとするか。
教室の窓を開け風が教室を通る様にする。
そして床においていたくす玉を教壇の上に立ち天井からぶら下げる。

「さて、クラスメイトの諸君、そのくらいしておきたまえ。2人にはこのくす玉を割ってもらわねばならないのだ！！」

そう言って、2人をくす玉の下に連れて行き、くす玉から垂れている紐を掴ませる。

「海斗、俺の為にここまでしてくれるなんて本当に嬉しいぞ」
「うん、海斗君、私の相談に乗ってくれたり、告白する勇気をくれたりしたこと本当に感謝してるよ」

「別に俺がやりたいからやっただけだ」
俺の言葉を照れ隠しかなんかだと思ったのだろう。
2人とも暖かい目で俺を見ている。畜生、そんな目で見るな。
笑ってしまいそうになるだろうが！！
必死ににやけそうになる顔をポーカーフェイスに保とうとするが、
駄目だ。
どうしてもにやけてしまう。
その顔を見られないように顔を2人から背ける。
「海斗、アンタも照れることがあるのね」
バニングスがなんか言っているが無視だ。
「よしそれじゃ紐を引くか」
「うん」
紐が引かれ、くす玉が割れる。
そしてその中から溢れたのは大量の紙吹雪、窓を開けておいたおかげでそれが綺麗に舞っている。
こっそりと教室の出口に近づく。
それを見たクラスメイト達は一斉に拍手の音を鳴り響かせ、教壇の2人は再び涙を流して喜んでいた。
見回してみるとクラスメイトの一部も泣いている。
達也、お前龍斗を妬んでた癖に号泣するとは何て涙もろいんだ。

感動的な場面だ。
だが、それも長く続くことはない。
どうやらクラスメイトの1人が気がついたようだ。
「あれ、この紙吹雪なんか文章が書いてあるぞ」
その言葉に他のクラスメイト達も床に落ちた紙吹雪から文章が書いてあるものを拾い上げ始める。
よし、達也やれ！！
達也が文章の書いてある紙吹雪を拾い上げた瞬間に合図を送る。
奴の顔にも満面の笑みが浮かんでいる。
うむ、感謝するがいい。
「『君は僕のお月さま。君「止めろ！！」』」
達也の言葉の途中で何を言っているかが分かったのだろう。龍斗が割り込んできた。
その顔は顔が面白いくらい真っ青に染まっていた。
「達也……お前、それは…」
信じられないという思いが籠ったその声は震えていた。
「そうだよ。これは龍斗作の月村さんへの思いを綴ったポエムだ！！」

教室が騒然となり、次の瞬間殆どの者が手に持った紙吹雪に書かれた内容を教えあっている。
ふふふ、俺がリア充野郎になったお前をただ祝う訳がないだろうが！！

さて逃げるか、グダグダしてるとバニングスに処刑される。

「あっ！　海斗！　あんた逃げんじゃないわよ！！」

バニングスが逃げる俺に気づいたようだが、既に遅いわ！！
行く手を塞げるならともかく、足の速さと持久力はサッカーやっている俺の方が上だ。
このまま逃げ切ってやるぜ！

問題は靴箱だな。

あそこではどうしても止まらないといけないから、そこまで行く間にどれだけ距離を離せるかが勝負になる。

教室を飛び出し、走り始める。

俺が最後に見た教室の様子は修羅場ってる龍斗と鬼の形相で達也を蹂躙し終え、こちらに向かって走ってくるバニングスの様子だった。

……もしかして、捕まったらおれに死ぬのかな？

俺はリアル鬼ごっこを逃げ切った。

うん、本当にあれはリアル鬼ごっこだった。

鬼のような形相をしたバニングスに追いかけられた俺が言うんだから間違いない。
でも逃げ切った後で気がついたけど、これって何の解決にもなってないんだよな。どうせ月曜になったら学校に行かないといけないから、バニングスに合う羽目になる。
うちの家族は悪戯とかする分にはある程度理解があるんだけど、学校を休んだり宿題やらなかったりしたらすっげえ怒られるんだよなー。

1日日がおかれることでバニングスの頭が冷えるのを期待するか。
どうせ龍斗と多村が別れることなんてありえないし、というよりあの作戦そのものに多村が関わってるしな。
つーか、今まで待たされたお返しとして龍斗の弱みを握って尻に敷きたいとか多村も大概だよなー。

多村、ここまでしてやったんだからフォローくらいちゃんとしてくれよ？

俺もできる限りバニングスのご機嫌取りはするつもりだけどさー、それにも限度があるんだからな。

綺麗な宝石拾ったら

今日は日曜日俺と龍斗、達也にとってはサッカーの日だ。
多村にとってはサッカーマネージャーの日。

そうそのはずだ。

そのはずなんだ！！

だというのに目の前で繰り広げられている光景は何だ！？

いつの間にサッカーグラウンドはカップルがイチャイチャする場所に変わったというのだ。
この糖度は監督の士朗さんが桃子さんとイチャついているとき並みだぞ！！

ばかップル、周りを見てみろ！！

お前達の甘ったるい空気に当てられて碌に練習できてないだろうが！！

こんなときに限って士郎さんが遅れてくるとか最悪だ。
士郎さんさえいればこの２人のばかップル空間を破砕できるというのに！！

昨日のポエムばら撒き事件が予想外に効いたのか、ラブ度が飛躍的に上昇して俺達の言葉ではびくともしやがらねえ。

「達也、俺が逃げた後何があったんだ。あの２人のラブ度が異常に

高くなっているんだが」

「雨降って地固まる、って奴かな。正直あの馬鹿らしいくらい甘ったるい展開をもう思い出したくない。これはあの後教室にいたみんなが同意見のはずだよ。痴話喧嘩は犬も食わないって本当なんだなと思ったよ」

心底、嫌そうな顔してるな。
そこまで甘ったるい空間があの後繰り広げられたのか。
見てみたかったような気もするが見てたらきっとその空気を台無しにしようとしただけだろう。
我ながら自制のきかない性格をしているからなー。
刹那の快楽のためにとんでもないことでも平然とやってしまっただろうから、これで正解だったんだと思うことにしよう。

「それにしても早く監督早く来ないかなー。そうしないと俺達の気力がゴリゴリ削れるだけでまともな練習にならないと思うんだが」

もう1時間もリフティングばっかりである。

「ダッシュも終わったし、フォーメーションの練習とかは監督がいないとできないし、ほんとやることがないね」

本当にな。
ＰＫはキーパーがフルボッコ（ガントレット）になるから嫌がられるだろうしなー。
何か面白おかしい暇つぶし兼練習になることが無いだろうか……
……思いついた。

「的当てをしよう」

「はっ？　的なんてどこにあるのさ」

その疑問は尤もだ。だがよく見ろ、すぐそこに的にしたいものがあるだろうが。

俺が黙って指差した先にはイチャついている2人

「いやいやいや、それはだめだろう！？　龍斗はともかく里香ちゃんに当たったらどうすんだよ！？」

里香に当たらなかったらＯＫな時点でお前も大概だな。

「ふんっ！　その程度のことに俺が対策を取ってないとでも思っているのか？　だとしたらお前には失望したよ」

大げさに肩をすくめて呆れた振りをしてみる。

やってみたかったんだよなこれ。

「なに？　何か確実な作戦があるとでも言うのか？」

食い付いたな。

だがそんなに身を乗り出してくるな。男の顔のどアップなんぞ見たくない。

「もちろんだとも、いいか？　多村に当たってしまったら監督に殺され、龍斗からは絶交されるだろう」

「改めてそう言われるとリスクの大きさが分かるな」

本当にな。

龍斗との絶交は俺にとってさほど痛手ではないが、監督を怒らせるのは避けたい。
監督から家族にこの的当てのことが伝わったら最悪だ。

「ああ、だがそのリスクを回避できる方法がある。しかも的にされた龍斗からさえ感謝される上に監督の追及からも逃れることができる最高のプランだ」

「……そんなものが本当に実在するのか？　海斗がハーレムを築くぐらい非現実なことだと思うんだが」

我慢だ我慢するんだ、俺。
ここで怒っても何にもならない。後で監督に怒られるだけだ。
復讐はばれないようにこっそりとそれが基本だ。
だからこの場では何もしないが、覚えていろよ達也、この恨みは忘れんぞ。

「……ああ、俺達がやることはとても簡単だ。的当てをしながらこういうだけでいい。

『やべっ！　龍斗！　ボールが多村の方に飛んで行った』

ただそう言うだけだ。そうすれば龍斗が身を挺して多村を庇うだろう」

「……」

うむ、俺の完璧な作戦に声もないようだな。
俺自身、こんな完璧な作戦を考えた俺が恐ろしいくらいだからな。
無理もない。

「海斗、君は僕の想像以上の外道だったようだね」

「失礼な。いいか？　この作戦は皆を幸福にする！　まず幸福になるのは的当てをして、あの甘ったるい空気をぶち壊し、その元凶に復讐できた俺達、これは問題ないな？」

『ああ、そこに異論はない』

周りには翠屋ＪＦＣのメンバーが集まってきていた。
お前たちはいつの間に集まってきた。
さっきまであっちこっちで好き勝手にやってただろうに、あれか幸福の匂いをかぎ取る嗅覚でもあるのか？

「そしてこの作戦は驚くべきことに的になった2人をも幸福にする。いいか諸君、よく考えるんだ。俺達が多村に向かってボールを蹴りそれを龍斗に伝える。そうすれば当然ながら龍斗は多村を庇い、庇われた多村は益々、龍斗に惚れるという寸法だ。終わった後に龍斗にそのことを伝えれば何にも問題は起こらない。むしろ俺達を庇ってくれるだろう」

「おお～～～」
「それ完璧じゃね」
「龍斗、さすがだ！」
「抱いてくれ！！」

最後の奴も的にしよう。
うんそうしよう。

「それでは行くぞ！！」

『おおぉぉーーーーー！！』

さすがに１０人以上の人間が一斉にボールを蹴ったら龍斗でもカバーしきれないということで、２人ずつやることになった。

念の為のフォロー要員も準備した。
これで万が一の事故も起こらない。

「ねえ、海斗、フォロー要員って何するの？」

無視だ無視。
おっ、始めるようだな。記念すべき1蹴り目だ、見逃すわけにはいかない。

「無視、無視なのか！？」

「背番号１２番」「背番号１３番」
「「行きます！！」」

２人の蹴ったボールはそこそこ鋭い軌跡を描きながら一直線に２人に向かっていく。

「「龍斗！　ボールがそっちに行った。気をつけろ！！」」

「えっ？」

馬鹿者が！！
さっさと多村を庇え！
そう思ったが既に遅い。
ボールは多村に直撃コースな上に龍斗は固まって動けない。
直撃する。
誰もがそう思ったはずだ。
だが皆の衆よ。俺がこの程度のイレギュラーに備えていないとでも思ったか？
「いけ達也よ！！」
「は？」
達也を思いっきり突き飛ばし、ボールと多村の間に割り込ませる。
鈍い音が響いた。
後に残ったのは何とも言えない空気、皆の視線は顔面と腹にボールの直撃を受けて倒れ伏した達也に注がれたいた。
「ナイスだ達也。お前の献身のおかげで怪我人が出なくて済んだ」
「海斗！　君ってやつは「だから気絶したふりをしておけ」」
足元にあったボールを達也目掛けて蹴り飛ばす。
頭部にクリーンヒット！

うむ、ナイスだ俺。そして優しいぞ俺。
なにせ頭を直接蹴らなかったからな！
完全に沈黙した達也を引きずり的(2人)の傍からどかす。
「お気にせずどうぞー」
「うっ、うん」
「…次こそは里香を護るんだ」
よし、次は龍斗が反応できないということはないだろう。
それにしても、今の惨劇から１０秒と経たずにイチャイチャを再開するとはバカップル侮りがたし！！
もしかすると俺以上に常識が浸食されているのではなかろうか？
「次、背番号１６番、６０番行け！　チャンスは１人１回だけだぞ、外すなよ？」
「「おぉぉぉぉーーーーーーーーーー！！！」」
気合の入ったいい返事だ。
だが蹴られたボールは見ているこっちがビックるするくらいへろへろでスピードが無かった。
当然ボールは２人まで届くことなく力なく地面に転がった。
その後も龍斗にボールを直撃させることができる奴は現れなかった。

そもそも狙いが逸れてて話にならない奴、狙いは正確でもシュート力が全く足りない奴ばっかりだった。
うちのクラブのレベルはここまで低かったのか！？
ＰＫのような状況で！
むしろ的の方が当たりに来てくれているこの状況で！
１発も龍斗に当てることができないだと！！

「……お前らには失望したよ。あれだけ当てやすい的に１発も当てることができないなんてな！」

「……いや、だって、当たったら痛そうだし…」

「何を今さら、そんなことは最初から分かっていただろうに」

「いやいや、人の不幸を想像していい気味だと思うのと、人を不幸にしていい気味だと思うのは別物だよ」

いつの間に復活したんだ達也、結構本気でボールを蹴り込んだからもう起き上がってくるとは思ってなかったんだか。
まあ、どうでもいいかそんなことは

「確かにそうだな。俺も想像の中の不幸より、目の前で起きている不幸の方が楽しめるからな。そう考えると確かに別物だよな」

達也にしてはまともなことを言うな。
頭打たれてまともになったか？

「……なんか失礼なこと考えてるみたいだろうけど、予想以上に君は最悪な人間だったんだね。見てみなよ、みんな引いてるよ」

おいおい、今さらその反応はないだろう？
俺は今までも欲望に忠実に行動してきた今さらそんな反応される理由はないはずだ。というのは俺の価値観で一般人の皆さん的には越えてはいけない一線を今回のことは越えたんだろうなー。

おかしいなー。
今回のこれはみんなが幸福になるのに、どこら辺が駄目だったんだろうか？

全く分からん。
分からんから今はその疑問は放っておこう。
今はそんなことを考えずに的当てに専念しよう。
龍斗の期待に応えるためにもな。

「まっ、そんなことはどうでもいい。達也、とりは俺とお前で締めるぞ」

「君って本当に自分中心で動いてるよね……」
達也は呆れた様な顔でこちらを見ているが

「そんなことは当たり前だろ？　まず自分が楽しくなるように動くんだよ。そしたら俺の行動に乗ってくれる同類が1人2人は見つかるからな」

「それって、僕が君の同類だって聞こえるんだけど？」

そんなに嫌そうな顔をするなよ。
傷つくだろうが。

「実際、そうだろ？」

「まあね。それは否定し切れないな」

照れ屋さんめ。
素直に認めれば楽になるものを。

「まあ無駄話はここまでにして行くか？」

「そうだね。そろそろ監督も来るかもしれないし、急ごうか」

「背番号2番、内田達也、行きます！」

達也の奴、うだうだ言ってたけど結局本気でいくのな。
奴の蹴ったボールは強烈なスピンがかかっている。
蹴った瞬間の軌道こそ2人には当たらないように見えるが徐々に軌道を変え直撃コースに近くなっていく。
はじめの方はまた外れるのかと油断していた龍斗の顔が焦りの感情に包まれる。
なにせ、龍斗が気づいた時には既にボールは多村から5メートルもないところに来ていた。

奴は焦って、多村を庇うように前に出る。

よし！
これで的当てが初めて成功する！

そう思ったのは俺だけではなかったはずだ。
だが、その予想は裏切られた。

ボールは大きくカーブし、多村への直撃コースに入った。
入ったんだが当然ながらそこでカーブが突然止まるというようなこともなくそのまま曲がり続けて2人に当たらず逸れていった。

「達也、弁明は？」

「ちょっとカーブをかけ過ぎた」

「んなことは見たらわかる！　そんなことよりこの何とも言えない空気に対する弁明を聞いているんだ！！」

皆が皆、直撃すると思って身構えていたのに最後の最後でこのどんでん返しだ。

「見ろ！　龍斗なんか多村の不思議そうな視線を受けて死にそうな顔になってるじゃねーか！　お前は本当に翠屋ＪＦＣのストライカーの1人か！？」

「いや、だってあれでしょ。僕はさ、技の達也（テクニック）なんて言われてるんだよ。だったらこういうとこでも技術を見せつけなきゃと思うじゃないか」

『自意識過剰だー！！』

誰もお前をそんなかっけー二つ名で呼んでねえよとか。
ああ、やっぱり唯一の常識人だと思ってた達也も結局は同類なんだ、とかいう絶望の声が溢れた。

「……まあいい。いや、よくはないが終わったことをどうこ

う言ってもしょうがない。だから俺がこの空気をぶち壊す！」

『おお～～～～！！』

ボールを地面に置き助走をつけるために少し後ろに下がる。

俺は小細工なんぞに頼らない。

俺が蹴るのは最高のスピードボールだ！

5メートルほどの助走をつけ、そこで得たスピードを全てボールに込めるつもりで思いっきり蹴り飛ばす。

完璧だ！！

コースは完璧に多村に直撃コース。

スピードも申し分ない……というか少々強過ぎるくらいある。

わざとだけどな。

「多村！　そっちにボールがいった。気をつけろ！！」

よしこれで準備は整った。

龍斗やるんだ！

ボールから多村を庇う為に龍斗がボールに背を向けて割り込む。

その次の瞬間龍斗にボールが直撃する。

『おお～～！！』

そこまでは皆の予想通りだったのだろう。つーか自分がやるんじゃなくて人がやるのを見る分にはお前らの良心は痛まないのか？

だがそこからが違った。

『おお！！？？？？』

俺の強烈なシュートは龍斗を倒したのだ。

龍斗が庇った多村ごと。

出来あがったのは多村を押し倒す龍斗という構図、いや～最近の小学生は進んでるなー。

野次馬しようか野次馬。

おおー、２人とも真っ赤になっちゃって初々しいなー。

というか龍斗の手が多村の胸を掴んでるのは俺の目の錯覚じゃないんだろうなー。

まあ、小学３年生の胸に興味の無い俺は後でからかいのネタが増えたなと思うくらいだが、その光景を見ている他の奴らからは殺気が漏れてくるのを感じる。

野郎の嫉妬は見苦しいぞ。

女の嫉妬は恐ろしいか鬱陶しいかのどちらかだけどな。

まあ、傍から見る分には楽しめるのが男の嫉妬と違ってるがな。

男の嫉妬はどうしようもないくらい見苦しいのにはかわりがない。

ミッションコンプリートだ。

いい暇つぶしにはなった。

「それでこれはどういう状況なんだ？　龍斗、君が説明してくれるんだろう？」

ああー、このタイミングできましたか、士郎さん！

「説明しましょう。俺たちは恋のキューピットごっこをしていたんです。あれを見てくださいあれが俺達の成果です」

いまだに監督が来たことにも気がつかず、真っ赤になって思考停止している2人を指さす。

だが俺は選択肢を誤ってしまった。

「確かに、初々しくていい感じだな。俺と桃子もあんな」

だから待っているのは地獄のストロベリー空間発生技、その名も『惚気』

全速力で離れようとするが、それよりも士郎さんが俺の肩を掴む方が早かった。

逃げられない。

ならばと達也達を巻き込もうとするも既に奴らは俺から距離を取っていた。

攻撃を分散させることもできないだと！？

俺このまま廃人になんのかなー。

「というわけで、来週の日曜日は他のチームと試合だ。体調を崩さないように気をつけるように。では、解散！」

「海斗、高町監督の惚気はとっくに終わってるよ。いい加減正気に

戻りなよ」

そんなことを言えるのはお前が1対1で士郎さんの惚気を聞かされたことがないからだ。と声を大にして言いたいが、そんな気力すらもありはしない。

くそっ！

惚気は最強の精神攻撃だな。

「おおっと、言い忘れたが海斗君は残ってくれ、話したいことがある」

この世に神はいない！

……少なくとも幸運の女神などと言うものはな。

「そんなに絶望に染まり切った顔しなくても大丈夫じゃないか？

さすがに監督もわざわざ惚気の為にお前を呼びとめることはない……

……ないと信じたいなあ…」

自分が信じ切れないなら言うなよ。余計に鬱になるだろうが。

「……逝ってくる」

「逝って来い」

「さて、海斗、君を呼んだのはなのはのことで聞きたいことがあるからだ」

おー、この人も親馬鹿だからなー。
最近様子がおかしい高町のことが気になってしょうがないのだろう。
その割には放任主義というか子供の意志に干渉するようなことはほとんどしないけどな。

「あれですか最近なんか上の空の様子だったり、なんでそんなとこに居んの？　と思うようなとこに居たりすることのことですか？」

「そのことだ。今のところ命に関わるようなことにはなっていないが万が一ということを考えておかないといけないからな」

普通命に関わるようなことにはそもそも関わらせないか、関わろうとしたら無理にでも止めるんだと思うけど、高町家に常識は通じないからな―。

「俺が知っていることは学校でも上の空になることが多いことと、そのせいでバニングスの機嫌がだんだん悪くなってきているということくらいですね。というか俺なんかに聞かなくても士郎さんならなのはの後をつければ簡単に何してるか分かると思うんですが？」

この人のスペックは異常なのだ。
なんかこの人だけ漫画の中から飛び出してきたといわれても納得してしまうくらいに
だからなんでこんな回りくどいことをしているのか分からない。

「そんなストーカーまがいのことを桃子が許してくれるはずがないだろう？」

「…そうですか」

頼むからまた惚気話にならないでくれよ。

「そうか、知らないか。君ならもしかしたら知ってるかと思ったんだけどな」

惚気話にならなかった。

よかった。

本当によかった。

「知らないものは知りませんよ。それに学校ではあまり高町と話しませんしね」

「ああ、そうみたいだね。なのはがそのことで文句を言ってたのを覚えてるよ。あれかい女の子と話すのが恥ずかしい年ごろかい？」

「いやそんなんじゃないですよ。ただ高町と話しているより龍斗とか達也とかと話してる方が楽しいだけですよ」

「……そうか」

あれ？

なんか不味いこと言ったか？

……ああ！！

これって高町と話すのが楽しくないと言ってるようなもんなんだな。

だけど実際、高町は良い子過ぎて話が合わないしなー。

からかう分には面白いんだけどな。

それにしたってバニングスのツンデレ具合には及ばないんだよなー。

なんというか全体的にキャラが立ってないというか。

小学3年生でキャラが立ってる、立ってないとか言うのはおかしい気もするがな。

まあそんなことより弁明だ弁明。
親馬鹿の士郎さんに娘のことを馬鹿にするようなことを言ってしまったんだ。
なんとか言い訳しないと物理的な制裁処置が発動しかねない。

「ええっと、あれですよ。あれ！　高町はいい子だから俺みたいな奴とは話が合わないんですよ！」

「……良い子、か……」

あれ？
もしかして別の地雷踏んだか？？？

「確かになのはは良い子だ。あのかわいい容姿に加え、相手のことを思いやる優しい心を持っている。だが、私たち家族に頼ってくれないんだよなあ。良い子であろうとし過ぎて家族に迷惑がかかることを極端に嫌がっているんだ」

ああ、それは分かる。
高町は少しでも他人に迷惑がかかることだと途端にどんなに自分がしたいことでも止める傾向があるからな。
良い子であろうとし過ぎて子供らしさが無いんだよな。
それで一緒に馬鹿をやり難いから学校じゃあんまり話さないんだよな。

「私達も頼って良いんだぞと背中で示しているんだがな。中々頼ってくれない」

「直接言ってみたらどうですか？　さすがにそうすれば高町も我儘を言いやすくなると思うんですが」

背中で語る男ってのは格好いいが言葉にしなきゃ伝わらないことの方が多いからな。

「『困ったことがあれば遠慮なく頼りなさい』と言ったこともある。だが、それでも効果が無かったから困っているんだよ。特に今回は夜どこかに1人で出かけることも多いようだからなおさら心配なんだよ」

言っても効果が無かったのか、それだと俺に出来るアドバイスはもうないな。

楽観的に考えれば、今回のことは人に頼らなくてもどうにかなる程度のことだから高町が頼ってこない、とも考えられるけど、逆に悲観的に考えると家族程度に話してもどうにもならない様なことになってるかもしれないんだよな。

「そうですか。すいませんが俺に出来るアドバイスはもうないです」

「いや、すまなかったね。なのはと同い年の君にこんな話をしてしまって、お詫びに今度家に来た時に何かサービスしてあげようか？」

「ありがとうございます！　その時はぜひシュークリームをサービスしてください！！」

「食い付きが良いなー。分かったよ、今度来た時はシュークリームをサービスしてあげよう。それじゃ、呼び止めて悪かったね。さよなら」

「さよならです、士郎さん」

さて帰るとしよう。
それにしても話を聞くだけでシュークリームが手に入るとは今日は良い日だ。

夕焼けに染まる川の土手沿いを歩きながらこの後の予定を考える。
さて、この後は家に帰って宿題して寝るだけ……じゃないな。
バニングスの機嫌が治っていることを祈りながら、どうご機嫌とるか考えないといけないな。
まず思いついた方法は食べ物で釣ることだ。
丁度士朗さんからシュークリームをサービスしてもらえることになっているから、それを利用すれば俺の財布のダメージは低く抑えられるはずだ。
欠点としてはこの頃食べてなかった翠屋のシュークリームを食べることができないことだな。
あの超絶的に美味しいシュークリームを食べることができないのは痛い。
他に何か手はないものか……ふむ、思いついたぞ。
近所のおばさん達を参考にすればなんかのブランドバックをあげればよさそうなものなんだが、さすがに歳が離れていて参考にはならないか？
いや、それ以前にそんなものを買うお金はどうするかという問題があるな。

そこら辺に札束でも落ちてないかなー。
ありもしない希望に向けて土手を少し探索してみた。

もちろん札束なんぞ見つからなかった。

ただ、代わりにバニングスの機嫌をとれそうなものが見つかった。
あったのは青い宝石のような物。
着いていた土を払って夕日にかざしてみると綺麗に光った。
不思議な光を放っていて、母親のネックレスについているサファイアよりかなり大きいし、光り方も違う。

女でただで宝石を貰えることを喜ばない奴はいないだろう。
ご機嫌取りの方法はこれにするか。

そう思って青い宝石をポケットに入れる。

本当に今日は良い日だ。
二度あることは三度あるから三度目の幸運に期待だ！！

「すいません。さっき貴方が拾ったものを渡してくれませんか？」

突然かけられた声、それは聞いたことの無い女の子のもので、振りかえった先にいたその女の子は夕日を背に立っていた。

「……」

声が出ない。
美しい美し過ぎる。
長い金髪が風に揺れながら夕日を受けているその姿は神々しいほどに綺麗だった。

「あのー、すいません言葉は通じてますか？　……バルディッシュ、翻訳魔法はちゃんと発動してるよね？」

『ｙｅｓ，ｓｉｒ』

「ならどうしてなんの反応もしてくれないんだろ??」

何言ってんのかは分からないけど小声で手に持った鎌（？）みたいなのと話してる。

服装もなんか変な感じのものだし、もしかしてこやつは俺の同類（オタク）なのか？

……いやまて、冷静になれ。

さっきはさらっと流したが、鎌と話しているのはおかしい。

鎌にバルディッシュとか名前を付けるのは俺たちオタクならよくあることだ。

５歩くらい譲ってその鎌に話かけることもあるかもしれない。

だけど、鎌が話すなんてことはあり得ない。

少なくとも俺の知っている常識の中では。

……ということはこれは非日常のイベントなのか？

上手くいったら血肉躍る冒険の世界に旅立つことができるのか！？

そうだ、きっとそうに違いない。

ボーイミーツガールで始まる物語なんて腐るほどあるからな。

これがそうでもおかしくないはずだ！！

だとしたら第一印象が良いにこしたことはない。

既にちょっと無視してしまっているのがマイナスポイントだがこれ

くらいなら挽回できるはずだ。

「ごめん、君があんまりに綺麗なんで見惚れてたんだ。本当に夕日を背に立っている君の姿は神々しいくらいに綺麗なんだよ」

相手に気に入られようとしてお世辞を言う時のポイントの１つは嘘を言わないことだ。

本当のこと（少なくとも自分がそう思っている）ことを言えば、そこには演技じゃない本物の感情が籠る。

そうなれば聞いている相手の心にその言葉が届き易くなる、と母が言っていた。

女優やっている母の言葉だ。信憑性はかなり高い。

現に俺の言葉に顔を真っ赤にしている金髪の少女がいる。

そんな姿も可愛いなー。

「ええっと、ごめん。ちょっと本心が出ただけだから気にしないで、それでさっき拾ったものってこの青い宝石のこと？」

さりげなく、嘘じゃないってことアピールして少しでも好感度を稼ぐのだ！

「……うっ、うん、そうだよ。その宝石はジュエルシードって言って私の探しているものなんだ。渡してくれないかな？」

くそー！！

そんなに可愛らしく小首を傾げるな！！

思わず告白したくなったじゃないか！！

初対面で告白とか失敗する以外の結末が思い浮かばない。
それでも告白したいと思わせるこの威力は恐ろしいものがある。

「渡してくれてありがとね。それじゃ、バイバイ」

そんな言葉を残してどこかに飛んで行った少女。
……あれ？
あれ～～～～～？

俺は宝石を渡した覚えなんてないんだが、なぜか手が少女の居た方に出されていてポケットが心なしか軽くなってる気がする。

はははっ、まさかね、まさか無意識のうちに渡したなんてことはないだろう。
そう思いたかったのに、ポケットに入れた手が宝石を掴むことはなかった。

マジか……マジでか！？

「糞ったれーーーー！！！」

名前すら聞いてないぞ！
それじゃ探しようもないじゃないか！？
……いやまて、金髪の少女、しかも赤色の眼、これは日本ではかなり特徴的だ。
それにあれだけ可愛いんだ。
聞き込みをすればもしかしたら手掛かりが見つかるかもしれない。

ポジティブに考えるんだポジティブに、ネガティブに考えてもテンションが落ちるだけだ。

そうと決めれば行動あるのみだ！

手掛かりなしだった。
まあ、河川敷から家に帰るまでに会った人に手当たり次第に聞いただけだから、しょうがないのかもしれない。
問題はそのせいで帰るのが遅くなって、熱々のハンバーグを食べ損ねたことだ。
冷えたハンバーグはそこそこしか美味しくなかった。

姉にも金髪で赤い目をした女の子を知らないかと聞いてみたが、心当たりはないということだった。

「なに？　その女の子に惚れでもしたの？」

と言って姉がからかってきたから

「そうだ！」

と答えておいた。
その少女を探している本当の理由はそれではなく、面白そうだからだが、一応一目惚れしたのも事実だから嘘ではない。
それに惚れたということにしておけば、より積極的に俺の手伝いをしてくれるかもしれないし、言い訳も簡単になる。

その後家族会議が開かれていた様だが、内容は知らない。

想像はつくがな。
そのせいで姉以外に話を聞くことができなかったけれど、まあ家族なんだし明日の朝にでも聞けばいいかな。

「それではただいまより緊急家族会議を始めます」

「さっさと始めなさい。こっちは仕事がやっと終わったばかりで早く寝たいのよ」

母さん、この話を聞けば眠気なんて吹き飛びますよ。

「議題は何と海斗の初恋相手についてです！」

「「「「「なに！？」」」」」

うん、その反応分かるわ。
あの海斗が現実の人間に恋するなんて私達にとっては青天の霹靂以外のなんでもないからね！

「情報源は確かなのか？　ガセだったりしないか？」

「ふっ、この情報の確度は確かよ。なにせ本人が認めたからね」

「「「「「あー」」」」」

「何、何なの！？」

急にテンション落とさないでよ！

「それじゃあ、海斗の嘘の可能性が高いわね」

「そうじゃな、姉のお前が家族会議を開いてこうして馬鹿な発言をするのを見込んだ嘘じゃろうな」

「そっ、そんなはずはないわ……ないはずよ……

……なければいいな」

駄目だ。

考えれば考えるほど海斗の言葉が嘘にしか思えなくなってくる。

「話はそれだけ？　それじゃあ今回の家族会議はこれで終わりにしましょう。解散」

みんな、さっさと席を立って自分の部屋に戻っていく。

海斗、怨むわよ。

再会への手掛かり

次の日の朝食の時に姉以外の家族に聞いてみたけど心当たりはないようだった。

「その女の子に惚れたの？」

と聞いてきた母に、姉の時と同じように

「そうだ！」

と答えたら、なにやら騒然となって昨日の夜に続き再び家族会議やってた。

会議に参加しようとしたら

「海斗は参加禁止だ」

と父から言われてしまった。
まあ内容が内容だろうからしょうがないとも思わないわけでもないが、参加できなかったことは面白くないので、お返しとしてリビングの時計の針を１０分ほど遅らせておいた。

「なんで私が言った時は信用されないのよー！！」

なにやら魂の籠った叫びが聞こえたが無視しよう。

さて学校でも聞き込みをするか。

忘れてた。

マジで完璧に忘れてた。

バニングスの機嫌を取ることを！！

俺がそのことを思い出したのはバニングスが校門で俺を待ち構えている姿を見て、なんか言ってるのを無視した挙句、横を通り過ぎた後だった。

まずいよなー。

これってかなりまずいよなー。

振り向くのが怖い。

さっきまで何か言ってたのに急に黙ってしまっているからなおさらだ。

殴られるかなー、殴られないといいな～。

逃げたいけどどうせ逃げても教室同じだし、マジでどうしよう。

1、土下座して謝る。

2、1日中何とかして逃げ切る。

3、翠屋のシュークリームで許してもらう。

ぱっと思いつくのはこれくらいか？

さてどうしよ「海斗、さっさとこっち向きなさいよ」……考える時間もないのか。

振り向いた先にはもちろんながらバニングスと月村、高町、そして野次馬が多数と言ったところだ。

こりゃ完全に見せ物になってるな。

……この状況を利用するか。

「バニングスさん、無視してすいませんでした。何か用でしょうか？」

まずは腰を低くして聞いてみる。

相手の機嫌をとるときの基本だ。

「アンタがそんな話し方をしても気持ち悪いだけだわ。いつもの話し方に戻しなさい」

酷い言われようだ。

効果がないどころか逆効果なようだ。

失点1と言ったところか？

しかし、俺もいつも偉そうな話し方をしているわけではないんだが、イメージと言うものは恐ろしいな。

「じゃあ、お言葉に甘える。バニングス、何か用か？」

「ええ、土曜の件よ。あれの舞台裏を里香から聞いてね。一応謝っておこうかと思ったのよ」

おお！！
多村ナイスフォローだ！
これでバニングスに翠屋のシュークリームをおごらなくて済むぞ。
「謝るなら頭を下げたらどうかね？」
……あれ？
口が勝手に動いたぞ。
「最初の方こそしおらしかったけど、怒られないと分かった瞬間態度が大きくなったなあいつ」
五月蝿いぞ野次馬。
だが言ってることは尤もだ。
我ながら態度の豹変具合に戸惑いすら覚える。
「……悪かったわね」
えっ！??
あのバニングスが碌に反論もせずにこの俺に頭を下げただと！！
信じられん。
写真を撮っておこう。
うむ、写真にも映るということはバニングスが頭を下げたというのは幻覚ではないということだ。
だとすると、顔を真っ赤にしてこちらに飛びかかってくるバニングスもまた幻覚ではないということなのだろう。
悪乗りが過ぎたな。

「海斗、またバニングスにぼろ負けしたな」

「龍斗、うるさいぞ」

ニヤニヤしながら話しかけてきやがって、そんなに俺の不幸が嬉しいか。

覚えてろよ。

そのうち多村との修羅場を演出してやる。

「大体、バニングスの戦闘力がおかしいんだ！　なんであそこまでこっちの攻撃が当たらないんだよ！？」

「まあそれは見ていてもそう思ったな。まるで次に攻撃がどこに来るか分かっているかのように見事にお前の攻撃をかわしてたからな」

あれはどう考えても不自然極まりなかった。

予知能力でも持っているのかと思いたくなるレベルだった。

「俺だって何回も殴り合いのケンカをしたこともあるんだぞ！　しかも全戦全勝だった！！　それなのにバニングスには勝てない。なぜだ！！？？」

しかも写真まで撮ったのはやり過ぎだったようで、結局バニングスに翠屋のシュークリームをおごることになった。

最悪だ。

「バニングスさんは君の天敵なんじゃない？　ほらカエルとヘビみたいにさ」

「そんな結論は断じて認められない！！」

そんな結論を認めるくらいならバニングスに純粋に実力で負けていると考えた方がよほどましだ。

実力で負けているなら努力で何とかなる可能性があるけど、根本的に勝てない関係だったら逃げるしかなくなるからな。

「まあ、俺たちにとってはお前がバニングスにぼろ負けしたことはどうでもいいんだ」

「どうでもよく「どうでもいいんだ」」

むっ、今回はなぜか異様に押しが強いな。

というよりいつの間にか周りにはクラスの男子の大部分が集まってきている。

いったいなんだというんだ。

「でっ、海斗よ。お前はバニングスに惚れてるのか？」

「は？」

いきなり何言ってんだこいつは、そうか馬鹿なんだな。

「おいおい、海斗、そんな憐れむような目で見るなよ」

「それじゃ嘲笑えばいいのか？」

「バニングス様をデートに誘ったくせに」

何言ってんだクラスメイトAよ。

というかクラスメイトAよ。貴様はバニングスが好きなのか？

Mなのか？

「まあ、そいつが言ったことが俺達がこうしてお前のところに集まっている理由だ」

「あれがデートに誘っているように見えたのか？　もしそうなら精神病院に行くことを勧めるぞ？」

確かにバニングスとは翠屋に一緒にシュークリームを食べに行く約束をしたが、別に2人きりという訳でもないし、そもそもぼこぼこにされていた俺がその場から逃れるために言ったのは俺とバニングスの乱闘を見ていたこいつらなら分かると思うんだが？

「確かにあれはデートに誘っているようには見えなかった。だが、結果としてはデートをするんだ。だから一応聞いて置かなければならないからな。なにせ聖祥大付属小学校の三大美少女の1人だからなバニングスは」

「あー、アイドルに虫がつかないか心配してるファンなんだなお前たちは」

馬鹿らしいが納得がいった。

確かにバニングスは基本的にいい奴だしな。
それに見た目もいい、将来は凄い美人になるだろう。
俺みたいに馬鹿をやる奴には尋常じゃなく厳しいがな。
「別に『バニングス様を護る会』ではバニングス様に彼氏ができることは否定しない」
おお、珍しいな。
だがそれなら俺がバニングスをデートに誘おうがキスをしようが関係ないと思うんだがな。
「だが！　お前のような悪い虫がつくことは許すことはできない！！」
「俺は悪い虫扱いか」
苦笑するしかないな。否定もできんがな。
「当然だ。むしろ悪い虫扱い程度では生ぬるいくらいと思っているんだが、お前は女の子を泣かせた実績はないからな。それ以上ランクダウンはされていない」
面白いことやってんなー、こいつらも。
俺も混ざりたいと思わないでもないが、今の俺にはバニングスより綺麗なやつを知っているからな。
混ざっても確実に浮くことになるだろう。
「そうか、お勤め御苦労さまだな。それで、俺がバニングスに惚れているかという質問だが、生憎俺はバニングスに惚れてなどいない」

いじり甲斐のある奴だとは思ってるけどな。

「やっぱりな」

「そうだよな」

周りに集まっていた奴らが口々にそう言いながらそれぞれの席に帰って行こうとするが、その前に聞きたいことがあるんだよ。

「おいおい待ってくれよ。俺が質問に答えたんだ。お前達も俺の質問に答えてくれ」

「なんだ？」

「金髪で赤い目をした黒い服の女の子を知らないか？」

『美少女か！？』

ハモんなよ、気色悪い。

「美少女だ」

「待て記憶を探ってみる」

全員が一斉に唸りながら考える人のポーズを取り始めた。

流行ってんのか？　そのポーズ。

『知らん！！』

だからハモんなよ。よし次ハモったら殴り飛ばそう。

「そうか。それならいい」

「まてまてまて、俺たちはよくない。お前が女の子の話を自分から振るなんて異常事態が起きたのに俺達がたったそれだけの説明で納得すると思うのか？」

「納得しろ」

『嫌だ！』

全員殴り飛ばすとしよう。

しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。

しばらくお待ちください。
しばらくお待ちください。

お待たせした。
１９人ばかり殴り飛ばすのに時間が掛かった。

「納得しろ。いいな？」

『嫌だ！！』

ほほう、まだ殴られたりないということか。

「まて！　その振り上げた拳を下してくれ。俺達がその女の子について聞きたいことは１つしかないんだ。どうかこの質問にだけは答えてくれ」

ふむ、さすがに土下座してまでそう言われては俺としても答えることはやぶさかではないぞ。
というかお前のプライドは随分と安いんだな、龍斗。

「いいだろう。質問は何だ？」

「ああ、それは何でお前がその女の子を探しているかだ。その理由次第では俺達の取るべき行動が大きく変わるからな」

そんなことか。
こいつらには本心の理由の方を言っておいた方がいいな。

帰るのが遅くなるのが遅くなったときの言い訳として『一目惚れした少女を探してた』が使えるから、家族には惚れたという理由の方を話したが、こいつらには『面白いことになりそうな予感がしたから』という本当の理由を話した方がいいだろう。

「それはな、面白そうな予感がしたからだ」

『よし、これからは金髪で赤い目をした黒い服の女の子がいても見て見ぬ振りをしよう』

こいつらはこういう行動を取ることが分かり切っていたからな。俺が今まで積み上げてきた実績の結果だ。

俺の面白そうな予感に関わると碌なことが無いのをみんな十二分に知っているから、絶対に関わってこないだろう。

よし、これで面白いイベントを1人占めできる可能性が上がった。後は無事にあの女の子を見つけるだけだな。

見つからない。

この一週間出来る限りの方法を使って探し回ったが、一向に見つか

る気配がない。
あんな美少女でさらには金髪という目立つ容姿なのに目撃情報すら全くない。
おかしい、おかし過ぎる。
あれか、非日常系の何か不思議な力が働いていて一般人には見つけられないのか？

「……っ、……いっ、おいっ、海斗！」

「ん？　龍斗、達也、何か用か？」

おいおい、そんな呆れた様な顔するなよ。
殴りたくなるだろうが。

「とりあえずその振り上げた拳は下せ。話はそれからだ」

ちっ、しょうがないな。
なにやら急ぎのようだし素直に言うことを聞いてやるか。

「海斗、『試合が始まるさっさとグラウンドに出るように』と監督からの伝言だよ」

「あれ？　もうそんな時間か？」

俺的な感覚ではまだ試合まで１０分くらいあったと思うんだが？

「ああそんな時間だ。お前がずいぶん考え込んでいる様子だから呼んできた方がいいと言った監督の観察眼は正しかったな」

「そうみたいだな」

いかんなー。
試合前だというのに全く試合に集中できていない。
これではいかん。

遊びは常に全力で、勝負事なら死力を尽くす。

それが俺のモットーだというのにこの体たらくとは本当にいかんな。
ここらで気合を入れなおしておこう。
気合を入れるために思いっきり頬を叩く。

「凄い音がしたね」

……我ながら思いっきりやり過ぎたな。
ちょっと頭がくらくらする。
まあ、気合も入って気持ちも切り替えれたからよしとするか。

「準備はできたか？　行くぞ」

「馬鹿言え。それはこっちのセリフだ。海斗こそ本当に準備はいいんだろうな？」

そんなに心配そうな顔をするなよ。
男のお前がそんな顔していても不愉快なだけだ。

「もちろんだ。今日は俺の粘り強いディフェンスで無失点で抑えてやるよ！」

「なら、俺はスピードを生かしてハットトリックを決めてやる！」

「それなら僕も華麗なボール捌きでハットトリックを決められるように頑張るかな」

「「「勝つぞー！！！」」」

もちろん試合は俺たちが勝った。
今は翠屋で祝勝会中だ。

そして俺は宣言通り、粘り強いディフェンスで無失点を達成した。

「それに比べてお前らは、自分の言ったことも守れんのか？　んん？？」

「殴りてえ、殴りてえけど、ハットトリック決めれなかったのは事実だしな……」

「そうだね、我慢するんだ我慢するんだ、僕」

必死に怒りを我慢するその姿がまたおかしくて、その姿を指さして笑いそうになったけど、やることが無くなったせいでまた見つけることが出来ていない少女のことに思考が飛んだ。

「達也、これはマジで重傷じゃね？」

「やばいくらい重傷だね」

なにせあの海斗が今の俺達を笑うことなく何やら考え込みだしたんだ。

「明日世界が終る」と言われたら、「そうかもしれない」と納得してしまいそうな異常事態だ。

「この1週間の海斗の頑張り具合からしておかしいとは思っていたけどここまでとは思わなかったな」

そうなのだ。

この1週間海斗は俺たちと遊ぶことすらせずに金髪の女の子を探していた。

普段の海斗なら2，3日探して見つからなかったら諦めるものなのに、1週間もの間探し続けた。

しかもその間一切悪戯はしていない。

まさに異常事態だった。

噂によると職員会議まで開かれて、さらに家庭訪問が実施されたらしい。

「何とかしてえよなー」

「そうだね」

この1週間、海斗が一緒に悪戯をしないせいで悪戯の楽しさも激減した。

居なくなってはじめて気がついたんだが、海斗は悪戯をするときは終わった時のフォローも考えて悪戯をしていたようだ。

俺と達也が2人で考えて実行した悪戯はやっている最中は面白いけど、終わった後になんか厭な感じの空気が残ることが多かった。それは悪戯された奴がこっちを不機嫌そうに睨んでいたからだったり、後始末が面倒極まりなかったり、と理由は色々だったけどそのせいで悪戯の楽しさが激減したのは確かだった。

だから俺達のこれからの楽しい学校生活の為にも少しでも早く海斗には立ち直ってもらわないといけない。

「けど、海斗を立ち直らせるってどうすればいいんだろう？」

そうなんだよな。

少し考えて驚くことになった。なんと海斗が俺たちに頼ってきたことは悪戯の実行を手伝うことやちょっとした雑用くらいで、プライベートのことは全く頼ってくることが無かった。

おかげでどうやったら海斗を立ち直らせることができるか全く予想がつかない。

女の子と付き合わせようとしても面倒くさがって嫌がるだけだろう

し、悪戯に誘っても断られた。
他に思いつくのは食べ物で釣ることくらいだけど、ぶっちゃけ海斗の家の食べ物のレベルを家で用意しようと思えば材料費だけで諭吉さまが何枚も飛んで行くから無理だ。
何気にこいつの家金持ちなんだよなー。
「なんかものを渡すってのはどうだ？」
「具体的には？」
「セミの抜け殻とか？」
「今の時期にそれは見つからないでしょ」
「ああ、俺も言っててそう思った」
だが、俺達の数少ない知識の中に男に渡すプレゼントなんて項目はない。
女の子に渡すプレゼントの項目なら里香に渡すためによく調べているけどな。
ん？
そういえば、里香に渡すつもりだったプレゼントで面白そうなやつがあった筈だ。
本当なら俺と里香で１つずつ持つつもりだったけれど、この際は里香に渡すだけでいいか。
「達也、これなんてどうだ？　中々綺麗だし、いい感じに見たこと

もないような不思議な感じなんだが」

ポケットの中から持ってきていた青い石を取り出して見せる。

「そうだね。見たところサファイアにしては色がおかしいし、ほんと不思議な感じの石だからもしかしたら海斗の興味を引けるかもね。駄目もとで試してみよう」

「そうするか。おい海斗プレゼントだ受け取れ！！」

俺の向かい側で椅子に座って考える人のポーズをしていた海斗に向かって思いっきり石を投げつける。

石はまっすぐ飛んでいき頭に直撃した。

まあ、１メートルくらいしかないから外しようがないけどな。

当たった音からしてずいぶん痛そうな感じだけど大丈夫か？

おお、頭を押さえてうずくまってしまっているな。

そんなことを暢気に考えていられたのはそこまでだった。

「……龍斗、貴様覚悟はできているんだろうな」

……やべえなこれは。

俺達の悪戯にキレたときのバニングスと同じレベルの危険度だと俺の勘がささやいている。

「龍斗！　なんで投げつけたりなんかしたのさ！　普通に渡そうよ！」

達也の言うとおりだ。

少し前の俺、なんで投げつけた！

「ついやってしまった。後悔はめっちゃしてる」
マジで後悔しかねえ。
なんで俺はこんなことやっちまったんだろうか？
殴り合いの為に準備運動をしている海斗を眺めながらそんなことを思っていた。
「海斗、海斗！　落ち着いて！　そして足元を見て！　そこに龍斗からのプレゼントがあるから！　きっと気に入ると思うから！！」
ナイスだ達也！
これで少しでも海斗の気が収まることを祈るぞ。
……『蹂躙される』から『叩きのめされる』位にはランクダウンしてほしいな。
「なに？　プレゼントとはどれ……もしかしてこの青い石か？」
足元に落ちている石に気がついてくれたようだ。
この隙に逃げる用意をしておこう。
「そうだぞ。里香に1つプレゼントして2人で同じものを持つ予定だったんだが、お前の落ち込みようが見てられたくてな。1つだけお前にプレゼントしてやる」
「……」
やべ、言い方が偉そうだったかな？

これでさらに機嫌が悪くならないとい「ありがとう」……は？

俺の聞き間違いか？

海斗が俺にありがとうと言ったように聞こえたんだが？

なあ聞き間違いだよな？

そんな思いを込めて達也の方を見てみたが、どうやら達也にも海斗の『感謝の言葉』が聞こえていたようだ。

口をポカンと開けたまま、呆然としている。

分かるぞ。

その気持ちは痛いくらいわかる。

いったい何が起きたというんだ！

そこまでその石が気に入ったのか？

「本当にありがとう。龍斗、お前と友達になれて良かったとこれほど感謝したことは今までない。本当にありがとう。それじゃあ悪いが俺はこれからバニングスにおごるシュークリームを取りにいかなくちゃいけない。それじゃあな」

海斗は石を胸のポケットに入れるとそのまま翠屋のカウンターの方に向かって行った。

「おっ、おう」

一気に上機嫌になって俺達の目的は果たせたが、いったい何でだったんだろうな？

今日は初めて龍斗と友達になってよかったと心の底から思えたな。
今までも一緒に楽しく馬鹿やってきたけど、心の底からこいつと友達になってよかったと感じたのはこれが初めてだ。

俺の中で龍斗の株が急上昇した。

なにせ俺がこの1週間探し求めても見つけることができなかったあの金髪の女の子の手掛かりを見つけてくれたんだからな！

「アンタ妙に上機嫌みたいだけどなんか悪だくみでもしてんの？」

言われの無い中傷だな。まあ、今の俺は機嫌がいいから許すけどな。
むしろ余裕を見せつけてやる。

「ふっ、バニングス、俺はいつも悪だくみばかり考えているわけじゃないぞ。それよりバニングスの方こそ人を疑ってばかりだから額から皺がとれないんじゃないのか？」

「皺なんてないわよ！」

テーブルを叩くな。
お茶が零れるだろうが、それに

「鏡が無いから気がついてないだけだ」

「アンタねー」
怒髪天を突く勢いとはこのことかと言った感じで怒っている。
バニングスらしいな。
「アリサちゃん抑えて抑えて、此処で暴れちゃ他のお客さんに迷惑が掛かっちゃうよ」
「……すずかの言う通りね。海斗、この場は見逃してあげるわ。だけど覚えてなさいよ？」
ナイスだ月村。
だがミスったなー。
バニングスの機嫌を取るためにシュークリーム奢っているのに機嫌を取るこの場で怒らせるとか何やってんだよ俺。
まあ、過ぎたことはどうしようもないから、此処からどうやってバニングスのご機嫌取りをするか考えるかな。
まずは話を適当にそらすことにしよう。
丁度いい話題もあることだしな。
「高町、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいか？」
「えっと何かな？」
いや、お前とお前の友人2人は疑問に思っていないようなんだが、
「なんでフィレットがここに居るんだ？」

「あっ、海斗君には紹介してなかったね。この子はユーノ君っていうんだよ。可愛いでしょ」

まあ確かに小動物系の可愛らしさがあると思うんだが、俺が聞きたかった意味はそうじゃない。

「いや、そんなことはどうでもよくてな。一応ここは飲食店だと思うんだが、そこにペットを持ち込んでいいのか？」

「あっ」

「そう言われてみればそうだよね」

「確かにアンタの言う通りよね」

「いや、もしそれがフィレットの踊り食いという美由希さんの新作創作料理なら仕方ないと思うんだが……」

おおー、このフィレット人の言葉が分かるのか？

さっきまでバニングス達にいじられてぐったりしてたのに急に立ち上がってきょろきょろしだしたぞ。

「さすがにお姉ちゃんでもそれはないよ！！」

『お姉ちゃんでも』ってところに高町の姉の料理への信用度が現れているな。

「分からんぞ。なにせ食べ物を炭に換えるのが得意な美由希さんのことだからな。炭にしなくてすむ料理法としてフィレットの踊り食いを考えたのかもしれん」

「……そんなことないって言いたいけど、ごめんお姉ちゃん、こ

の前お姉ちゃんが『生のままで完成させられる料理だったら私でも作れるよね』って言ってるのを聞いてしまった私からはこれ以上反論できないよ」

小言でぶつぶつ言っているようだが、この議論は俺の勝利のようだな。

そうは言っても勝ち負けなんぞよりバニングスの気を逸らすことにどれだけ成功しているかが問題なんだがな。

「まあ、大人しいみたいだし俺は特に気にならないんだけどな」

「ならなんでそんなこと言ったの！？　海斗君のせいでユーノ君が怯えてるの！」

「ああ、すまないなユーノ。生きたまま食われるなんて嫌だよな」

おおー、頷いてるぞ、このフィレット。

もしかしてマジで人の言葉が分かってるのか？

「なあ、高町、このフィレット人の言葉が分かるのか？　さっきから妙に俺の言葉に反応したとしか思えない行動してるんだが」

「そっ、そんなことはないと思うよ？　とっても頭が良いけどね」

全く隠せてないが、何か隠してるなこれは。

というかユーノよ。

お前が本当に人の言葉が分かるのなら、高町がどうにかして誤魔化そうとしているのに、高町の言葉に対して頷くような反応をするのを止めろよ。

疑いが深まるだけだぞ？

「そうよ。確かにこのフィレットは頭いいみたいだけど、フィレットに人の言葉が分かるわけないじゃない。馬鹿なの？」

「バニングス、これはロマン（夢）の問題だ。いいか？　確かに今まで俺たちは人の言葉を理解できるフィレットに会ったことはなかったかもしれない。だが、もしかしたらこのフィレットは人類が初めて出会った人の言葉を理解できるフィレットかもしれないだろう？」

ロマン（夢）は大事だ。
それがなかったら毎日がつまらなくなる。

「ああ、馬鹿なのね。そんなわけないじゃない」

「夢が無いなー」

「アンタは夢の見過ぎよ」

まあ、否定できんな。

「だけど、夢を見れないよいはよほどいいと思うぞ。バニングス達には将来の夢とかないのか？」

「あるわよ。私はお父さんの会社を継ぐことよ」

「私は工学系の仕事に就きたいかな」

「……私はまだ決まった夢はないかな」

ふむ、バニングスと月村にはある程度の将来のビジョンがあるようだが高町にはないみたいだな。
まあ、小学3年生でしっかりした夢を持ってる方が少ないと思うんだけどな。

それにしてもお花屋さんとかケーキ屋さんとかそんな感じの夢も持ってないんだろうか？

夢はひとまず持っておくといいものだと思うんだが。

「高町は何にもないのか？」

「う、うん、まだこれになりたいって夢はないかなー」

「そうなのかー。まあ、小学3年生で夢がしっかり固まってる方が珍しいよな」

「そう言うアンタの将来の夢は何なのよ」

よくぞ聞いてくれたバニングス。
俺には壮大な野望があるのだ！

「俺の夢か？　それは『新世界の神なることだ』！」

お前達正気を疑うような目で見るなよ。
確かにこの言い方だと到底正気だとは思えないだろうけど、さすがにそこまで露骨に態度に表さないでもいいだろうに。

「……病院行ったら？」

くっ、負けんぞ！
その程度で俺は夢を諦めない！
「バニングス、俺は本気で言っているんだ。馬鹿にしないでもらおう」
「それならなおさら病院に行くことを勧めるわ。アニメとか漫画の見過ぎで本気で現実と妄想の境目が分からなくなったんじゃないの？」
ふん、そんな境目をぶち壊すのが俺の夢なのだ。
「そんなことはないぞ。まあ、『新世界の神になる』と言っても別に俺は世界をどうこうしようってわけじゃないしな」
「それならどうやって神様なんかになるのよ？」
「それはもちろん新世界を作ってだ。創世は神様の偉業の中でも尤もポピュラーなものだろう？」
「ねえ、なのは、すずか、こいつ本気で病院に連れて言ったほうがいいんじゃない」
「……私もさすがにここまでいくとフォローできないよ」
「月村家でかかりつけの病院があるからそこを紹介しようかな」
おいおい、目の前で内緒話とかするなよ。凄まじく気になるだろうが。

まあ、内緒話が終わるまで、ユーノをいじって暇を潰すか。

やっと内緒話が終わったようだな。
暇すぎてユーノを弄り抜いてしまったぞ。
そのせいかぐったりしたまま動かなくなってしまたが問題ないだろう。
少なくとも俺にとってはな。

「海斗君、ちょっと待っててね。お父さん達に頼んで黄色い救急車を呼んでもらうから」

「待て高町、本気で俺を病院に連れて行こうとするな」

冗談なら笑って許せるが、本気だと全力で怒らざるを得んぞ。
俺の夢を馬鹿にするというは重罪だからな。

「だって、海斗君の夢は本当に夢物語だよ？　叶える方法なんてないんだよ？」

「そんなことはない。キチンと俺には夢を叶えるための具体的な方法に心当たりがある。というよりそれさえないのにこんな夢を持つはずがないだろうが」

「……海斗君ならそうとも言い切れない気がするの」

「同感よ」

「否定はできないかな」

日ごろの行いを少し改めるべきだろうか？
俺の評価はここまでやばいものだったのかと今実感しているところだ。

「で、その具体的な方法ってのは何よ？　一応聞いてあげるわ」

「よくぞ聞いてくれた。そう方法とはな。量子コンピューターを作ることだ」

「何それ？」
「何なのかな？」

まあバニングスと高町には分からないだろう。
というより月村が「ああ、あれか」と言う顔をしているのに驚いたぞ。

「無知な奴め。月村は知っているようだぞ」

「そうなの？」

「うん、と言っても私はお姉ちゃんが話してたのを聞いただけだからあんまり詳しくはないけど、簡単にいえば凄く性能が良いコンピューターだよ」

凄い簡単に言ったな。
それくらいじゃ全然凄さが伝わらないと思うんだが

「海斗、それが何で新世界の神になる具体的な方法なのよ」

ほら伝わってない。
いや、これは単にコンピューターの知識が無いだけか？
「それはもちろんそれ使って新世界を作るからだよ」
「わけわかんないわ」
まあ、コンピューターの知識が無いならしょうがないか。
「いいか、量子コンピューターがあればそれを使って新世界と言っても過言ではない様なゲームが作れるんだ。そこにはドラゴンもいるし、エルフとかドーワフとかもいる。そしてそのゲームのクリエーターとなった俺は果ては魔王とかも自由に生みだせる。まさに新世界の神になる」
知ってるか、とても簡単なプログラムだけど、ただ単にディスプレイに『Ｈａｌｌｏ　ｗｏｒｌｄ』と表示させるだけのプログラムしかまだ作ったことはないけど、何かを自分で作り出した時の万能感は凄まじいんだぞ。
「ああ、早い話なんか凄いゲームを作るのが夢なのね」
「……そう言われると何か釈然としないがそれも俺の夢の一面ではあるな」
「へえー、アンタのお兄さんもゲームのプログラマーって聞いたんだけど、お兄さんの影響？」
「というより家族全員からの影響だな。ほら俺の家族の仕事って女優の母、アニメの脚本家の父、ゲームのプログラマーの兄、漫画家

の姉、小説家の祖父、音楽家の祖母って感じだろう」

「凄いよね」

本当にそう思う。
よくぞここまで揃えたって感じの布陣だからな。
家族だけでエンターテイメント作品を作れる。

「その影響を受け続けてきたからな。何か作ることをやってみたかったんだ」

「それで、新世界を作るとかどう考えても思考がぶっ飛び過ぎでしょ」

そうかもしれん。
だが夢は大きければ大きいほどいいというのが家の家族のモットーだからな。
はじめから叶いそうな小さな夢だけ持っていても大成は望めないそうだ。

ふむ、機嫌も随分良くなったようだ。
ご機嫌取りはここまでにしておくか。
携帯で時間を確認してみたら丁度祝勝会も終わりに近づいてきたみたいだしな。

ん？

メールが入っているな。

なになに、あー、馬鹿姉め。

また締め切りまじかで修羅場ってるのか。
小3の弟にべた塗り手伝えとかそれはどうよ。
まあ、絵の描き方を習っている俺としては手伝わざるを得ないんだけどな。
「悪い、家の姉が漫画の締め切りで修羅場ってるみたいだ。それを手伝いに家に帰るわ」
「そう、それじゃあね。今日は意外にいいディフェンスしてたわよ」
おお、バニングスから褒められた。
予想以上に照れ臭いな。
「それは当然だ」
だからそれを悟られないように見栄張らないとな。
「月村と高町も明日学校でな」
「うん」
「ばいばい」
さて、さっさと帰って姉の手伝いでもするか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9154z/

Dreame Researcher

2011年12月31日21時53分発行